

校長室からこんにちは！

No. 26

12月20日

発行者 中田 禎二

当たり前のこと

ドリルをする。毎日1時間の家庭学習をする。提出物を忘れない。課題として出されたプリントをする。たったこれだけのことでこの中学校は劇的な変化を遂げ、その名も知られた生徒指導困難校から県や国の学力テスト結果の上位校となりました。

この中学校は都市部にある大規模公立中学校です。もちろん、今もいろいろな生徒が様々な課題を抱え登校して来ますからいろいろなことが起こります。しかし、そこにかつてのような「荒れ」はなく、多くの生徒の学びの姿があります。

その学校改革は、振り返れば別に変ったことはしていなかったのです。始めに例を述べましたように、ただただ「当たり前」と言われることを日々実践したのです。しかし、その指導の徹底ぶりが半端ではなかったのです。つまり、出した物は「確実に回収する」スタンスで、家庭学習も提出物もプリント類も100%こなすことと、100%提出を求め続けたのです。それを教師は地道に粘り強く指導していったのです。

その源泉は校長の意志でした。校長は徹底を強く要求し決して妥協を許しませんでした。校長は腹をくくっていましたから、それは強烈でした。そして、その結果としての変容ぶりなのです。

ところが、実は並行して二つの取組みもなされていました。一つは「自尊感情を育てること」(自分自身を基本的に価値あるものとする感覚)、もう一つは情報公開です。とりわけ、この中学校は体験活動に熱心に取り組む、その中で生徒たちに自分の良さを気付かせていきました。そして、教育活動の大半を良いも悪いも保護者のみならず地域住民に知らせ続けたのです。

この中学校から本校が学ぶことは三つあります。私はそれを次のような問いかけとして自らに突きつけながら、ドーハ日本人学校の2学期を振り返っているところです。

一つ目は、知徳体の基礎基本の徹底を図っているのか。

二つ目は、自尊感情の育成に努めているのか。

三つ目は、保護者のみならず日本人会の皆さんに学校を開いているのか。

この学校には後日談があります。この「改革」校長の後任校長が4月1日に着任し、数日後の入学式で全員に7秒の礼(7秒間をかけるとも丁寧な礼)をさせ、来賓・保護者から驚嘆の声があがりました。その場にいた私は、校長が変わろうとも、指導者が変わろうとも、地道な取り組み、当たり前の徹底は、そこに教師としての信念があれば、僅かな指導で、このように、あの生徒たちを変身させるという事実を目の当たりにしました。

つまり、取組みは本物であったということです。ちなみにその年の体育祭の生徒の動きはこれまでになく素晴らしかったです。そこには、生徒会が進行しきる姿がありました。

『3学期も当たり前の取組みに努めてまいります。皆さま、よいお年をお迎え下さい。ありがとうございました。』

校長写真館



ドーハっ子たちに、ウインタースポーツの季節がやって来ました。

これからは、砂

丘マラソンや運動会を目標にして、その土台となる「走力」をつけていきます。

中休み、解放感あふれる顔の子どもたちが気持ちの良い汗を流しています。

ちょっとお耳を...

12月1日、2014年度の就職活動がスタートした。我が家の娘達も忙しくしているようだ。

〇年前とは、そのシステムと社会状況が違うからごちゃごちゃ言わないように努めているが、やっぱりつつい、「お父さんの頃は」が出てしまう。

「何ととっても人間性が大事だから平生往生だ」と演説ぶつたら、「面接に辿り着くことができたらよ！」とピシヤリ。

でも、ドーハで出会った素敵な人たちの話だけはしつこく伝えていきたい。